様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１３３０１

研究課題名（和文）日本の若者のボランティアのSNS利用に見る現実の身体とヴァーチャルな身体の交錯

研究課題名（英文）Juxtaposition of phisical bodies and virtual bodies in SNS use of young Japanese volunteers

研究代表者
三浦　敦（Miura, Atsushi）

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：６０２６１８７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、海外支援ボランティア、介護ボランティア、そして大学のスポーツサークルの、３つの場において活動する日本人の学生・若者を対象に、彼らの現実での活動と、そのインターネットやSNSへの投稿写真を比較検討した。その結果、人々にとって現実における身体は、コントロールできないのに対し、写真の中の身体はコントロールが可能となり、多くの身体がある時はそこに共振が生まれるが、ボランティアに参加する学生の写真には、そこに、独自の人間関係の理想の表象が現れ、写真独自の公共空間が作られていた。このように、写真は新たな公共性を生み出すことで、現実の公共性の再構築に貢献している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、1990年代から日本において急速に発展したインターネット利用とボランティア活動という、二つの活動の間で生じた相互干渉が、どのように日本の若者の身体利用に影響を与えているのかを、特にその公共性という観点から明らかにしようというものである。ここには社会的には、この時代にインターネットの利用を通じて生まれてきた独自の公共空間の意義を考察するという意義があり、学術的には、従来通りの民族誌的フィールドワークとネット情報の分析を組み合わせるという、新たな方法論の模索を通じて、インターネットというコミュニケーション手段が作り出すあらたな社会関係の意義を問い直すという意義を持っている。

研究成果の概要（英文）：In this study, we realized three case studies based on researches conducted among young Japanese working as volunteers in oversea assistance, volunteers in caring activities for helping disabled people, and university students pursuing sport training. We observed their activities, interviewed them on the activities and the pictures they took with their smartphones, and analysed pictures they up-loaded to SNS sites, blogs, or homepages, in order to compare the nature of physical body with the representation of bodies in photography. The analysis revealed that people cannot fully control their physical body while they can control bodies in photo images where bodies are showed in symbiosis. Pictures of students in voluntary activities explicit the ideal social relations in a particular way, and build up a public space specific to the photographic image. Therefore, the digital photography creates a new public space and contributes to reconstruct the public space in the physical world.

研究分野：文化人類学

キーワード：インターネット　写真　身体　ボランティア　スポーツ　公共性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、三浦敦（研究代表者）、寺戸淳子（研究分担者）、およびファビエンヌ・デュテイユ＝緒方（Fabienne Duteil-Ogata、海外共同研究者、フランス・ボルドー大学）の三人の議論の中から着想された。

今まで三浦は、ボランティアなど非営利的経済活動の分析を行う一方、データとしての写真という視点から、日本の若者が撮る携帯電話写真に現れた身体性と社会関係の質について検討してきた。寺戸は、介護ボランティアの調査を行う中から、若者たちが活発な SNS の利用を通じて、積極的に「ボランティア」という肉体労働に関わりながら「共同体」を作ろうとしている状況を考察してきた。デュテイユ＝緒方は、インターネットが日本人の死者の観念を変容させつつあることを見出し、さらに SNS での写真利用が身体のあり方を変容させつつあると考えるようになった。

この三人の議論においては、日本ではインターネットの普及とボランティアの興隆がほぼ同時期に起きたこと、そのボランティアの多くが肉体労働を内実としていること、そして今日のボランティア活動は SNS の媒介で活発化し、そしてそこに参加している人々、特に若者の間ではデジタル写真を用いたコミュニケーションが日常化していることの４つの状況が確認された。そしてその上で、現実において社会関係を媒介する「身体」は、今日では SNS、特にそこに投稿される種々の写真により改めて独自の意義を与えられているという仮説を立て、日本の若者の身体的活動を対象に、文化人類学や社会情報学・メディア論などの研究成果を踏まえた検証を行うことになった。

本研究は、研究内容としては文化人類学での物理的な身体技法や身体の象徴性をめぐる議論と、社会情報学やメディア論における社会的身体の自己表出をめぐる議論の統合を目指すものである。方法論的には、従来のフィールドワークに加えて、近年着目されている大量デジタルデータである SNS データの活用という新しいアプローチを併用する。このネット上の大量デジタルデータの解析は、日本の文化人類学ではまだ少数の研究しかないが（社会情報学・メディア論では多くの研究がある）、欧米ではすでに幾つかの重要な民族誌的研究が生まれており（A. Castilli, *Les liaisons numériques*, 2010; Coleman, “Ethnographic Approaches to Digital Media,” *Annual Review of Anthropology*, 2010; Boyd, “Making Sense of Teen Life,” *Digital Research Confidential*, 2013 など）、本研究の海外共同研究者であるデュテイユ＝緒方も、フランスにおいてそうした共同研究プロジェクト「身体・ネットワーク・デジタルアイデンティティ」に参加している。

２．研究の目的

本研究は、日本の学生や若者たちによるボランティア活動やスポーツ・アソシエーションの活動を事例として、活動参加者それぞれの SNS 利用に現れるヴァーチャルな自己表出としての身体性と、現実の肉体としての身体性の相互関連性を検討することで、デジタル化がもたらした身体性の変容、さらにはそもそもの「身体性」概念の意味について明らかにし、従来の文化人類学における身体論に新たな次元を加えようというものである。

具体的には、ボランティアの場やスポーツ活動の場での、活動参加者やボランティアの受入れ者の、それぞれの SNS やインターネット・サイトにおける身体性の自己表出・他者表出は、どのようにそこでの身体利用とかかわり、どのような身体性を創出しているのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

（１）伝統的フィールドワークによる民族誌データと、SNS やインターネット上のデジタルデータの、それぞれの分析を組み合わせる。

（２）肉体的身体とヴァーチャルな身体の境界が曖昧化する領域を分析することで、今日の日本における「身体性」の意味を検討する。この問題の考察において、大学というボランタリーな活動が活発な場にいて、生まれてからすでに発達したネット環境の中で生活し、SNS が子供の頃から生活の前提となってきている日本の大学生は、極めて興味深い調査対象となる。

（３）この新たな「身体性」の介護ボランティアという場での考察はさらに、従来は政治経済的な用語のみで議論されてきたオールタナティブ経済（営利を追求しない経済）と公共性をめぐる議論に、「身体の非営利化」という観点から新たな次元を付け加えることを可能にする。この身体の非営利化の検討は、「ボランティアの場での崇高とされるゆえに低報酬／無報酬の身体」と「ネットに現れる経済的価値の高い身体」の対比も浮き彫りにし、この二つの身体が結びつく場の検討を通じて、オールタナティブ経済における「公共」の意味をめぐる議論にさらなる深みを与えることができる（ここでは、日本においてボランティアは本当に「身体の非営利化」なのか、

ボランティアにおける「こころ」の位置はどのようにゆがめられてきたのかも検討される）。

４．研究成果

本研究の成果は、次の３つの報告として、2019 年 2 月にフランス・ボルドー＝モンテーニュ大学において開かれた国際シンポジウムにおいて発表された。

（１）サイバースペースにおける管理できない身体と思いのままの身体：日本のアルシュ共同体のネットサイトの事例から（寺戸）

この研究では、身体と空間を巡るエドワード・ホールの近接性の理論を用いながら、ケアの空間とデジタル空間という、対立する二つの空間における身体の違いを検討した。エドワード・ホールは人間の距離の感覚に、親密距離、個人的距離、社会的距離、そして公的距離の、４種類の「身体的」距離があるとする。彼によれば、この 4 つの距離は五感（彼は五感を、聴覚と視覚という遠距離を受け入れる感覚と、短距離でしか作動しない触覚をはじめとする感覚に二分する）を通じて規定・評価され、適切か不適切かが決められるとし、またその評価は文化によって異なってくると指摘する。

ケアの空間として、ここではラルシュ共同体（ジャン・ヴァニエにより 1964 年にパリ北東郊外のトロリー・ブルイユで設立）を取り上げる。ここでは知的障害者とアシスタント（多くは社会貢献活動に参加した若者で、1 年滞在する）が一つの家に住み、日常生活を共にしている。ここでは、日本のラルシュ共同体である「かなの家」とそのネットサイトを例として取り上げ、現場とネットでの身体様式にかかわる要素を分析し、デジタル世界での身体様式と比較していく。

また、空間との関わりについては、「帰属 belonging」（ジャン・ヴァニエの哲学の基礎）、「場にいること in-between」（ミルトン・メイヤロフの「ケア」についての研究の基礎）、そして「共通世界」（「現れの空間」「人々の間にある世界」は人々を結び付けると同時に分離するものであり、これは『人間の条件』におけるハンナ・アレントの議論の基礎）の、3 つのキーワードを用いて検討する。特に 3 つ目の「共通世界」は、次の二つの理由で本研究に有用である。第一に、共通世界において最も重要なのは自由であるが、サイバー空間においても同様だからである。第二に、アレントは、肉体的苦痛は「人々の間」を無化すると考えて共通世界から肉体的苦痛（生的現象）を排除したが、我々は「ケア」こそ「人々の間」を強化するものと考えるからである。

本研究を通して、二つの身体の対比が明確になった。ケアの空間における「管理できない」身体と、サイバー空間上の「思いのまま」の身体である。

かなの家とそのネットサイトの身体は、3 つの点で管理できないものとなっている。第一に、そこでの身体は、スティグマを与えながらその身体を現れの空間（アレント）から排除しようとする社会的コントロールから逃れてしまう。第二に、ケアを必要とする身体は我々の意思のコントロールを逃れている。そして第三に、かなの家のブログに載せられた写真に示された身体は、社会的なコードに従わない自由な動きをしている。すなわち、そこで人々は、ハグをしたり、手を握ったり、互いに触り合い、肩をぶつけ合い、ダンスをしたり気ままに体を動かしており、誰もその場にあった身体の動きに囚われていないのである。この、公共空間における身体接触と親密距離（そして同時に「その場にいること」）の優位性は、日本人の自己の身体管理の一般的様式を超えるものである。ここでは、身体的接触の優位性が障害者の存在によってもたらされ、さらに「触ること」よりも「触られること」が意味をもつだけに、ここでの身体はいっそう、日常的に当たり前に身体に対して行われている管理を逃れるものとなっている。

管理できない身体とは対照的に、サイバー空間での身体は次の 3 つの点で「思いのまま」の身体となっている。第一にそれは、自由に切りとられ提示されるすべての写真の中の身体と同じく、「状況に埋め込まれていない」つまり「コンテクスト・フリー」である。第二に、サイバー空間では、視覚（遠距離を受け入れる感覚）が重要となるため、距離は無化され、いつでもどこでも誰とでも接触したり切断したりする自由（全能性）を完全に享受する。サイバー空間は、接続し、送り、共有し、情報を広めるといった、それ自身の独自の特徴をもつ行為の空間であり、主体はそこでその存在をコントロールする。第三に、一つのシーンに複数の身体が集まった場合、それらは共振し同調して統制がとられている。

（２）人道支援活動に参加する日本人学生の SNS の写真に見る身体と演劇性（三浦）

SNS、とくに LINE に載せられたディジタル写真は、日本人のコミュニケーション方法を大きく変えた。LINE でメッセージを送るには、まず閉じたグループを作る必要がある。メッセージと写真はその中で共有されるのである。SNS における身体性を議論するにあたって、人道活動やボランティアはとくに興味深い。というのも、日本人にとってボランティア活動はとくに肉体的

労働を意味するからである。本論では、カンボジアで人道活動に参加する日本人学生が LINE にアップした写真の検討を通じて、ディジタル写真での身体の提示の仕方とそこでの彼らの身体性を分析する。

LINE に投稿された写真は、グループ毎に内容が異なっている。とくにカンボジアで一緒に活動する人たち同士で作るグループと、彼らが日本にいる友人や家族と作るグループとでは、投稿する写真が大きく異なっている。一緒に活動する友人同士の間で共有する写真の場合、写真は仕事の後に取られるが、写真の中で人々はカメラ（すなわち写真を見る人）に向かって体をうごかしており、しばしば腕を上に上げている。日本にいる友人や家族に送る写真は、しばしば仕事の最中に取られることも多く、そこでは人々は腕を下げて静止した姿勢を取っていたり、あるいはカメラに気がついていなかったりすることが多いほか、人物のいない写真も多い。ここでは前者の写真を「近接写真」、後者の静止した人物の写真を「静止写真」、人物のいない写真や人物がカメラに気づいていない写真を「客観的写真」と呼ぼう。

この３つのカテゴリーはそれぞれ、インスタグラムとは異なり、それぞれに独自の語りを生み出す。その相違は演劇性とディスクールの概念で説明できる。

近接写真と静止写真は、被写体となっている人々がカメラを意識しているという点で演劇的である。これに対し、客観的写真では、被写体となっている人々や物はカメラを必要とはしていないため、近接写真や静止写真とは異なる語りを生み出す。美術史家マイケル・フリードは、絵画や写真におけるモダニズムを演劇性からの脱却に見出しているが、学生たちの LINE 投稿写真は、むしろ演劇性を示している。演劇的写真の場合、近接写真では被写体とカメラはダイクシス的関係に基礎を置いているが、静止写真ではそうではない。学生が自分たちを「かわいい（女性の場合）」あるいは「かっこいい（男性の場合）」というように見せようとするのは、この近接写真の場合である。ここには、フリードのいうモダニズムとは別の、ハンナ・アレントが指摘する多数性としてのモダニズムが現れている。

日本人が人道的活動をしばしば肉体的活動とみなすとしたら、静止写真の「静的」な印象は矛盾しているように見えるが、ここには若者たちに労働と余暇の区別が現れている。近しい友人たちとの人間関係を強調するのは、この後者の場合だけなのである。こうしてみると、近接写真の動きのあるポーズは、実際の友人関係における動く肉体的身体の重要性を示しているといえよう。

（３）写真インタビューから明らかになる、スポーツクラブで活動する日本人学生における Instagram での身体の表象（デュテイユ＝緒方）

大学の運動部所属の日本人学生（主として柔道部と現代ダンス部）に対するオンライン・オフラインでのフィールドワーク（2016 年７月、2017 年７月、2018 年７月に実施）を経て、本論では彼らが Instagram の自分のアカウントに提示した身体性の表象を、彼らのアップしたプロフィール、写真、キャプションを通して検討する。1 日に少なくとも４～５時間を練習に費やす若い運動選手として、彼らは好んで身体自体や自分の身体、あるいは練習パートナーの身体の、それぞれのイメージを、アップするのだろうか。

この問題に対して、本論ではジョン・コリアーが『映像人類学』で示した写真インタビューの方法を検討し、それを柔道部と現代ダンス部に所属する数人の学生の Instagram のアカウントの「フォネオグラフィー（音韻表記）」に適用した。そうすることで、彼らの写真について、様々な情報（写真の選択、そのコンテクスト、その説明、および語りの背景）を得ることができた。

写真に関する「フォネオグラフィー」の特徴と、とくに写真ないし映像（最近ではビデオも）に特化した SNS である Instagram の特性について検討したのち、若者たちの身体表象を、アルベール・ピエットの「比較オントグラフィー」に関する先駆的研究にヒントを得て、そのスタイルの形象から分析し、神的共同的な状況での存在様式と類似した、身体の存在様式の解明を試みた。

大学の運動部で活動する学生のフォネオグラフィーの分析により、彼らは、インスタグラムでは日常の練習風景はほとんど投稿されず、むしろ日常の学生生活の中での「特別」な瞬間を投稿していることがわかった。それらの写真のフォネオグラフィーにおいては、行動と感情がその中心にあり、身体はそこでメトニミー、あるいはパロディーとして、さらには遊びとして表現される。そしてその際、「他者」が重視され、コミュニケーションをとる身体が創出されるのである。

参考文献

Arendt, H. (1958) *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press.

Collier, J. (1967) *Visual Anthropology: Photography as a Research Method*, Hold Rinehart and Winston.

Fried, M. (1980) *Absorption and Theatricality: Painting and Beholder in the Age of Diderot*, Chicago:

University of Chicago Press.
Fried, M. (2007) Jeff Wall, Wittgenstein, and the Everyday, *Critical Inquiry* 33: 495-526.
Goffman, E. (1959) *Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Anchor Books.
Goffman, E. (1963) *Stigma: notes on the management of spoiled identity*, Prentice Hall.
Gunthert, A. (2015). *L'image partagée, la photographie numérique*. Paris: Textuel.
Hall, E. T. (1966) *The Hidden Dimension*, Doubleday.
Manovich, L. (2017). *Instagram and Contemporary Image*. http://manovich.net/index.php/projects/instagram-and-contemporary-image.
Mayeroff, M. (1990) *On Caring*, Harper Collins.
Piette, A. (1992) La photographie comme mode de connaissance anthropologique, *Terrain*, 18 : 129-136.
Vanier, J. avec François-Xavier Maigre (2017) *Un cri se fait entendre. Mon chemin vers la paix*, Bayard.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Fabienne Duteil-Ogata	４．巻 32
２．論文標題 Beatrice Galinon-Melenec, Fabien Lienard, Sami Zlitni, dirs, L'Homme-trace. Inscriptions corporelles et techniques	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Questions de communication	６．最初と最後の頁 414-415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/questionsdecommunication.11407	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三浦敦	４．巻 51(2)
２．論文標題 Appropriation and Re-appropriation of Lands since the 16th Century in Bohol, Philippines	５．発行年 2016年
３．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	６．最初と最後の頁 333-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） KY-AA12017560-5102-14	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 三浦敦	４．巻 51(2)
２．論文標題 Cultures differentes, evolutions similaires : Histoire fonciere et evolution economique aux Philippines et au Senegal dans une perspective comparative	５．発行年 2016年
３．雑誌名 埼玉大学紀要（教養学部）	６．最初と最後の頁 345-360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） KY-AA12017560-5102-15	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 寺戸淳子	４．巻 19
２．論文標題 「私の隣人」とは誰か：〈ラルシュ〉で生きられる「友愛のポリティクス」	５．発行年 2016年
３．雑誌名 アリーナ	６．最初と最後の頁 160-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 27784747	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺戸淳子	4．巻 8(1)
2．論文標題 市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義：「権利」と「祝祭」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 宗教と社会貢献	6．最初と最後の頁 55-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/68257	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Junko Terado
2．発表標題 Le corps incontrole et le corps a son gre dans le Cyberspace : le cas du site internet de la Communaute de l ’ Arche au Japon
3．学会等名 Journee d'etude "Le corps des jeunes e l ’ ere numerique : engagement et re-presentation au Japon et en France"（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Atsushi Miura
2．発表標題 Le corps et la theatralite des photos dans le SNS des jeunes etudiants japonais engages dans une activite humanitaire.
3．学会等名 Journee d'etude "Le corps des jeunes e l ’ ere numerique : engagement et re-presentation au Japon et en France"（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Fabienne Duteil-Ogata
2．発表標題 Re-presentations du corps des etudiants japonais, engages dans des clubs sportifs, sur Instagram, a partir de la photo-interview
3．学会等名 Journee d'etude "Le corps des jeunes e l ’ ere numerique : engagement et re-presentation au Japon et en France"（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 寺戸淳子
２．発表標題 〈ラルシュ〉共同体運動の「公共性」と「宗教性」
３．学会等名 日本宗教学会第75回学術大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Fabienne Duteil-Ogata
２．発表標題 Regard anthropologique sur une Appli de karate; une innovation pedagogique?
３．学会等名 7eme Biennale Internationale de l"AFRAPS（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計7件

１．著者名 信田敏宏、白川千尋、宇田川妙子、福武慎太郎、増田和也、渡邊登、加藤剛、鈴木紀、三浦敦、小河久志、杉田映理、関根久雄、中川理、子島進	４．発行年 2017年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 384（79-101）
３．書名 グローバル支援の人類学：変貌するNGO・市民活動の現場から	

１．著者名 P. Luna, N. Mignemi, O. Messaoud, A. Miura, P. Blanc, A. Maldonado, E. Le Roy, S. Misiami, G. Beaur	４．発行年 2017年
２．出版社 Paris: Syllepse	５．総ページ数 305（45-68）
３．書名 Predateurs et resistants: appropriation et reappropriation de la terre et des ressources naturelles (16e - 20e siecles)	

１．著者名 中野智世、前田更子、渡邊千秋、尾崎修治、寺戸淳子、加藤久子、勝田俊輔、水島治郎、桜井健吾、長井伸仁、村上信一郎	４．発行年 2016年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 352（231-262）
３．書名 近代ヨーロッパとキリスト教：カトリシズムの社会史	

１．著者名 鶴岡賀雄、山﨑亮、江川純一、渡辺和子、髙井啓介、山本伸一、青木健、毛利晶、野口孝之、寺戸淳子、佐藤清子、久保田浩、井上まどか、西村明	４．発行年 2017年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 414（265-291）
３．書名 「呪術」の呪縛・下巻	

１．著者名 前川啓治、深川宏樹、浜田明範、里見龍樹、木村周平、根本達、三浦敦、箭内匡	４．発行年 2018年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 384（261-318）
３．書名 ２１世紀の文化人類学	

１．著者名 櫻井義秀、寺戸淳子、真鍋一史、ウォルフガング・ヤゴチンスキー、清水香基、、猪瀬優理、片桐資津子、冬月律、川又俊則、李賢京	４．発行年 2019年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 438（63-91）
３．書名 宗教とウェルビーイング ― しあわせの宗教社会学	

１．著者名 池澤 優、冨澤かな、矢野秀武、立田由紀恵、川瀬貴也、伊達聖伸、江川純一、塩尻和子、澤江史子、ジョリオン・トーマス、上村岳生、藤原聖子、稲場圭信、金子昭、寺戸淳子	４．発行年 2018年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 272（245-260）
３．書名 いま宗教に向きあう4：政治化する宗教・宗教化する政治〈世界編II〉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	寺戸　淳子 (Terado Junko) (80311249)	国際ファッション専門職大学・国際ファッション学部・准教授 (32828)	
研究協力者	ヂュテイユ＝緒方　ファビエンヌ (Duteil-Ogata Fabienne)		フランス・ボルドー＝モンテーニュ大学准教授